

〔書評〕

Walter C. Kaiser Jr.

Toward an Exegetical Theology: Biblical
Exegesis for Preaching and Teaching

Baker Book House, Grand Rapids, 1981, 268pp.

下村 茂

著者は、トリニティ神学校の校長で、セム語、旧約学の教授である。福音主義神学会会長の要職も経験され（一九七七）、福音派の旧約学者として知られている。最近の著作の中には、*Toward an Old Testament Theology* (1978), *The Old Testament in Contemporary Preaching* (一九七九、第三刷) などがある。

本書は四部、十二章から成っている。

第一部 序論、第一章（積義神学における危機）、第二章（積義の定義と歴史）においては、現代キリスト教界の混迷が、積義神学、解釈学、説教の在り方に起因すると分析する。積義の歴史を使徒時代、教父時代、中世時代、宗教改革時代、改革後時代に分けて概観し、近代聖書批評学の下での積義研究に欠如していたものを明らかにしようとしている。教界の混迷を念

頭に置き積義の必要を論述する。(1)根本的には聖書観に問題があるものであり、それを克服するのは積義神学の確立である。(2)神学教育における「積義の位置付け」が不適切であった。積義と説教とは一つのものであり、積義神学は、積義者たる牧師と聴衆の実際の必要との間にある懸隔を橋渡しすべきものである。(3)神学的確信を異にする人々と、教会に負わされた問題の解決を求めて対話が成立するとすれば、それは聖書積義の領域においてである。

第二部 統辞的・神学的方法 (The Syntactical-Theological Method) 第三章から第八章において、著者の提唱する積義神学が論述され、その事例が提示される。

第三章（脈絡の分析）。「従って問題は、隣接する脈絡を失念しあるいは無視する誤ちが一般的であることだけではない。むしろもっと深刻な誤ちは、本文を細分化しあるいは断片とし、その上で脈絡から孤立した句、文、あるいはパラグラフにさえ意味付けができると仮定することである」（七〇頁）とし、健全な積義には全体的脈絡においてそこに含まれる項目の観察が必要であると説く。四種類の脈絡がある。(1)区分の脈絡 反復される語、句、節、文、見出し、転移接続詞、副詞、修辭的疑問文、時間場所場面の変更、呼格、動詞の時制態相の変化、主語目的語の変化、鍵語、前置詞、概念の反復などにより見出される。(2)書（巻）の脈絡 聖書著者が明らかにするか、あるいは勧告、項目の配置などにより推定する。(3)正典脈絡 著者は

B・S・チャイルズに注目する (Introduction to the Old Testament as Scripture, Fortress Press, 1979, 688pp. 評者注、チャイルズは旧約緒論史をふりかえりつつ、歴史批評学を批判し、教会に伝達され受容されてきた聖書があるがまさに正典として扱うよう要求する。この大著は、少数の例外はあるが「歴史批評学上の諸問題、正典としての形状、神学的・解釈学的意義」に分けて各書の考察が進められる。その方法が「正典批評学」Canonical Criticism とみなされるのを残念だとしている。その意図が、消極的には歴史批評学の方法の優位性を相対化し、積極的には解釈者を促して伝達されたままでのものとして聖書本文を精査させ、その後に信仰共同体に対するその役割を批評的に識別させることにあるからである。「正典的緒論は目的ではなく、釈義の出発点に他ならない」。著者はチャイルズの論述を称賛するが次の批判を加える。すなわち、聖書の正典としての形状を強調する余り、聖書著者の歴史性が失われる。第二に正典全体がすべての釈義の脈絡として使われなければならないものではない。第三は、歴史批評学の成果である文書資料説や伝承批評を採用することは方法的に誤りである。(4)隣接する脈絡 歴史的、神学的、論理的、心理学的結合の仕方がある。

第四章(統辭的分析)。解釈学の伝統的方法である「文法的・歴史的方法」は *usus loquendi* を明らかにすることにおいては今なお有効であるが、現代解釈学の関心が語り手ではなく聴き

手に移っており、その両者を結びつける機能は十分果たしていないとする。聖書解釈学の方法を、「統辭的・神学的釈義」と呼ぶ。この方法においては、統辭論と神学とが強調される。

聖書は単一の文学様式で書かれているのではなく、また言語の用法と機能を知る鍵はそれが使用される文学様式にあるから、散文、詩文、歴史記述文、知恵文学、黙示文学の区分に注意する必要がある。様式批評の成果に関して学者間の一致は少なく、また本文を犠牲にして理論をたてる誘惑が多いことを考慮すればその方法論を受容することはできない。しかし様式が最終的にその内容が意味することを支配しあるいは指示するのではない限り、釈義者にとってペリコーペの範囲の決定、その内部構造、聴衆、その応答、説教のための必要に限れば有用である。

統辭的分析においては、パラグラフが中心となる。そのパラグラフの中で (1)主題となる命題、(2)その命題に対する、そのパラグラフにおけるすべての文、節、句の関係、(3)他のパラグラフとの関係を明らかにして行くのである。

第五章(言語的分析)。聖書著者は言語と慣用語法の積み上げによってその独特の思想を表現するが、その分析に関する問題を扱う。聖書著者の言わんとする意味の決定は (1) *usus loquendi* (2)著者自身の用語の定義 (3)属格形、同格形、その他の定義のための句、(4)構文、(5)脈絡の対照、対比、(6)旧約詩文におけるヘブル詩の並行法、(7)並行する章節、などによる。文化

に関する用語、比喩、並行節、主要神学用語の、聖書著者自身の「意図」を明らかにしなければならない。例えば、文化に関する用語は、その文化的特徴を平均化して規範的に教えたり、あるいはすでに消滅してしまったものの報告にすぎないかのよう扱ってはならない。(1)特定の時、文化、一時性の形式を反映する用語で使信が語られているなら、それを明確にする。しかし文化に関する表現には全く、無時の原則や神学が欠けているというのではない。(2)文化的形式と内容が区別されるのは次の場合である。著者がその永遠の原則のために背景として「記述し」、自分と後代のために「規定」している。第二はその時代の文化から、身近にある例を使って神学的原理を示している。第三は同じ神学的原理が、文化的には同一でなくても同義的な手段で表現されている。第四は聖書自体が同一の内容を、別の形式あるいは制裁を適用する。(3)神の本質に基づくものはすべての信徒に適用される。(4)注意深くかつ限定的でなければならぬが、神の本質に基づく命令でも状況によって適用の変更が行なわれることがある。(5)全く文化的項目であると思われる場合、釈義者は特に脈絡を強調しなければならない。ことばは意味を表わすための基本要素であるが、それを決して脈絡から切り離してはならないのである。

第六章(神学的分析)。説教者は、歴史主義と無味乾燥な記述主義を避けようとして健全ではない教訓的、比喩的、心理学的、霊的、聖書を選択して主観的にまとめてしまう方法に流さ

れてしまう。聖書の核となる使信を識別する手続きがなければならない。聖書神学が釈義の対として必要である。

「聖書によって聖書を解釈する」という宗教改革者の原則は、「教会の伝承が聖書の解釈者である」とするローマ教会の見解を拒否するものであった。それが失念され、混乱が見られる。神学的釈義が行なわれるときにはその過程を注意深く、限定しなければならない。すなわち、(1)釈義中の本文に見られる、明白な断言の検討、(2)研究中の章節に時間的に先行する複数の章節に見られる同様な断言との比較である。信仰の類比を解釈学的、釈義学的に使用するには、注意深く、通時的な統制がなされなければならない。本文の神学的意味を明らかにするために、数種類の「神学用語辞典」が使われる。しかしJ・バーが指摘する問題があることも見落としてはならない。

第七章(説教的分析)、第八章(統辭的・説教的分析)。説教の組立てのための項目が提示され、著者の提唱する釈義法による事例が、旧約から三篇、新約から四篇紹介されている。

第三部 特殊事例、第九章から第十一章まで、講解説教における預言書、記述文、詩篇の使用について論じられる。第四部 結論、第十二章(釈義者/牧師と神の力)。

多様な読者を想定しているためか論述は多岐にわたり、必ずしも読み易いとは言えない。しかし釈義神学の確立を求める著者の意欲が感じさせられる。聖書解釈学への新たな関心が高まる中で福音主義的方法論が論述されるのは喜ばしい。三百九十

以上の釈義事例を本稿に納められず、評者の非力ゆえ十分まとめられなかったことは残念。精読の書として推薦して紹介をしたい。

(日本同盟基督教団・国立キリスト教会牧師)

村瀬俊夫

Donald Guthrie
New Testament Theology
Inter-Varsity Press, 1981, 1064pp.

本書の著者Donald・ガスリー博士は、ロンドン・バイブル・カレッジの副学長兼新約学教授で、すでに十年余り前に出版された大著『新約聖書緒論』(New Testament Introduction, 1970)の著者として広く知られている。それは参考文献表・索引を入れると一〇〇〇頁を越える大作であるが、本文批評や正典成立史を扱った総論(General introduction)の部分がなく、すべてが新約各書の緒論にあてられている。その大作を物してから約十年にして、同じ著者の手になる、またも一〇〇〇頁を越える大著『新約聖書神学』(New Testament Theology, 1981)が世に送り出された。この新著を今年に入って間もなく、東京御茶の水の書店CLCで手にしたとき、私はしばし驚嘆を禁じ得なかった。最近の欧米の福音派キリスト教の優勢は、伝道への熱心な取り組みとともに、それを支える学問的(神学的・聖書学的)レベルの向上と相俟っている。そのことを有力に証しする大作が、更に一つ加えられたことになる。この「新約聖書神学」に関する大著の特色は、著者が自ら序

文で述べているように、多くの類書と異なる扱い方をしている点にある。「私の主眼は、新約聖書における種々の異なる資料に注意を向け、同時に幾つかの大きな主題の下にその教えを提示するような書物に仕上げることであった。それで、本書がキリスト教教理へのハンドブックの役を果たせたらと願っている。」

本書の冒頭の「序説」(Introduction)に五〇頁余をあて、「新約聖書神学の発展史」「新約聖書神学の性格と方法」「神学と宗教との区別」「新約聖書神学と教義学との関係」「純然たる文学的方法の限界」「全き分析的方法の弱点」「新約聖書神学において人格が占める位置」「新約聖書神学において正典が占める位置」「歴史と神学との関係」「新約聖書における多様性と統一性」「新約聖書神学のために役立つ背景的研究」「真正性の問題」を論じたあと、最後に著者は「新約聖書神学の構造」について述べ、それは基本的に二つの種類があると言う。一つは、新約聖書の諸文書を幾つかの文書群に分類し、各文書群の神学的特色や主張を明らかにしようとするものである。他は、幾つかの主要テーマを選び出し、そのテーマを支持し展開している聖書の箇所を提示しようとするものである。本書以前の福音派の代表的な新約聖書神学の著作 George E. Ladd, *A Theology of the New Testament*, 1974 は、前者の方法によっている。それに対して本書は、後者の方法によりつつ、それなりの工夫と改善を試みている。

選ばれているテーマは、扱われる主題が神の啓示であるとの確信から、おなじみの組織神学のそれによっている。それは左のとおりである(括弧内の数字は、そのテーマにあてられている頁数)。

- 一 神(四〇)
- 二 人間とその世界(一一二)
- 三 キリスト論(一一九)
- 四 キリストの宣教(一一二)
- 五 聖霊(六三)
- 六 キリスト者の生活(一二八)
- 七 教会(八九)
- 八 未来(一〇三)
- 九 新約聖書の倫理的側面(六〇)
- 十 聖書(三〇)

右の各テーマは、昔も今も変わりなくキリスト者が関心を寄せ、それらについての問いかけに対する答えが真剣に求められているものばかりである。わけでもキリスト論は新約聖書神学の中心であるから、それに一番多くの頁をさき、綿密に考察されている。「キリスト論」とそれに密接に関連した「キリストの宣教」の部分を合わせると三〇〇頁近くに、本論全体の三分の一を占めている。それからユニークな扱いとして、①福音における教理と倫理の不可分な結びつきが新約聖書神学の重要な要素を成すとの判断から「新約聖書の倫理的側面」の章が

設けられていること、②最後に「聖書」の章を置いて新約聖書の正しい理解に光をあてようとしていること、の二点があげられる。

このようにテーマ別に新約聖書神学の叙述を進めていく方法において、著者はもう一つの方法を取り入れる工夫をして、かなりの改善を試みている。それは各テーマについて新約聖書の証拠をあげて論述するとき、新約諸文書の種類別にその証拠をあげる方法を採用していることである。その種類別と順序は、大体①共観福音書、②ヨハネ文書、③使徒の働き、④パウロ書簡、⑤ヘブル書、⑥公同書簡、⑦黙示録となっている。テーマによっては、さらに細かく(ヨハネ文書をヨハネ福音書とヨハネ書簡に分け、公同書簡のうちの特定の書だけ扱うというように)分けたり、関係のない部分を省いたりしている。それから最後に、当該テーマについて新約聖書全体が種々様々に述べるところを歴史的パースペクティブに照らして「要約」するか、あるいは「結論」としてまとめ上げる。こうして著者は、新約聖書が内包する歴史的多様と統一性とを明らかにしようとしている。

著者が新約聖書神学の中心とみなしている「キリスト論」は、左のように多くのサブテーマに分けて綿密に論述されている。

序説

人であるイエス、イエスの人間性、人間イエスの無罪性

このようにキリスト論の取り扱いにおいて、まずイエスの人性に正当な位置づけをしていることは、当然のことである。しかし、キリストの神性の強調に一方的に走りやすい福音派のキリスト論の傾向を見るにつけ、キリストの人間性の理解に最大限の努力を傾けている著者の態度は、聖書に基づく福音理解の健全さを示すものと言えよう。

キリスト論的出来事の中で、著者は特に「復活」を重視し、その項を「そのキリスト論的重要性」という見出しでまとめている。その中で著者は、「復活の主要な意義は、それがキリストの人格と働きを私たちに理解させるのに貢献していることである。人となった先在のキリストは、その復活が現実の出来事であったときにのみ考えられることである」(三七〇頁)と書いている。復活は、キリストが成就したことに対する神の満足を表わしている。もしキリストがよみがえらせられなかったのなら、その死は何の意味もなかったであろう。それゆえ、復活は人間の救いのために不可欠のことである。キリストがその民の福祉のために絶えざる関心を寄せ、とりなしをしていくのださとの確信も、復活の出来事によっている。このように著者が述べることは、すべて聖書の証拠に照らして綿密に論じられた結果であって、心からアーメンと言わざるを得ない。

同じことは、本書で扱われるすべてのテーマについても言える。したがって、著者が本書に「キリスト教教理へのハンドブ

キリスト論的称号——序説、メシヤ、ダビデの子、しもべ、人の子、主、神の子、ロゴス、「わたしは……です」語録、最後のアダム、神、キリスト論的称号の要約

キリスト論的「賛歌」

キリスト論的出来事——序説、処女降誕、復活、昇天

結論——神にして人なるイエス

このようにキリスト論に関するサブテーマがほとんどめれなく選び出され、包括的に講述されている。特に注目したいのは、人となった神であるイエス・キリストの人的側面ないし人間性に、まず光をあてていることである。「序論」に続く「人であるイエス」の項を、著者は次のように書き出している。「イエス・キリストについての新約聖書の教説を検討するにあたり、イエスがまことの人であったことを示す証拠に真っ先に注意を向けるのが自然である。彼が人間にまさる方であることを示す証拠を最初に取り上げることもできたであろう。しかし、それらの証拠は、イエスの真の人性を背景にして学ばれるとき、もつと適切なものとなるのである。このテーマについて証拠を並べ立てることは不要と思われる。しかし、初代キリスト教の時代に広がった、(あの仮現論のように)イエスの人間性に逆らってイエスの神性を大げさに演じようとした傾向にかんがみて、多くの点で高く上げられるために来た方が、それにもかかわらず、まことの人にほかならなかった事実を確かめることは、非常に重要である」(二二〇頁)。

「ツクの役」を果たさせようとしたねらいは、一〇〇%成功している。その点での本書の価値は、いくら高く評価しても評価し過ぎることはない。

しかし、評者の率直な感想は、それにとどまらないものがある。望蜀の感を禁じ得ないが、あえて申し述べて責めを果たしたい。

本書は、まさに「新約聖書神学」という衣をまとったキリスト教教理の大型ハンドブックである。綿密な教科書または百科事典的知識の宝庫としては申し分がない。しかし、きわめて聖書的ではあっても、その論述の仕方はあまりにも平板に過ぎる。創造的な神学的思索に欠けることを惜しみたい。著者がキリスト論を新約神学の中心とみなし、キリスト論的出来事として特に「復活」を重視するなら、それを新約神学の叙述の土台に据えて、ダイナミックに創造的な神学的思索を展開してほしい。

(日本福音長老教会・蓮沼教会牧師、聖契神学校講師)

本書の著者は、オックスフォード大学で旧約学を担当している著名な神学者であるが、この書物を読み終えての印象は、著者の学問的立場の正しさと深さということではなかった。

むしろ、著者が所属していると思われる英国国教会を始めとする、いわゆる「主流派教会」の著しい凋落であり、更に、その役割を交代しつつあるかに見える「福音派」教会の台頭という事実を、著者を取り囲む情勢として、覚えたことであつた。

こうしたキリスト教史における変化の中で、著者は、この現象を決して好ましいこととは見ていない。むしろ、信仰的生命が衰退しつつある主流派教会に向かい、福音派の信仰の特質と問題点を教示することにより、もう一度、昔日のように、主役の座を確保せよと鼓舞しようとしているのである。それが著者の本書を記した動機であるので、この書物は、学者を対象とした神学書というよりも、信徒に対して、福音派の内容と神学的基盤を解説しようとしたものと言える。それゆえ、福音派の立

場から読むと、説得されるというよりも、著者の、福音派に対する感情的な反発を強く感じてしまうのである。

それは、例えば欧米で、大学生伝道を眺める時、かつて主役の座を占めていたSCM（またはYMCA）が、もはや、宣教の精神を失い、代わって、IVF（またはKGK）が、確実に、信仰共同体としての生命力を増しているという現実を見て生じる、主流派教会内の、心あるキリスト者の、いらだちに似た感情と言える。そして、多くのキリスト者が、福音派に流れてゆく情勢に対し、著者は、福音派の実態を明示することにより、その流れをとどめようとしているかに見える。

この著者の立場と動機は、私どもの福音派の動きの中で、次のようなものとして見出し、解することが出来る。福音派教会で、一つの霊的現象として「異言」が語られることがある。その聖霊体験をどのように評価するかにより、福音派と言われる教会でも、全く相反する立場が生じてくる。そして、この現象を、キリスト教信仰においては、本質的でないどころか、有害ですらあると受け取る牧師たちが、異言に対し、冷やかに、あらゆる面で否定的に、場合によっては嘲笑的に解明する姿の中に、この著者の、福音派に対する共通の姿勢と視点を知ることが出来るかも知れない。

批判にさらされている福音派に属する私どもは、本書を手がかりにして、できれば、主流派の信仰者と生産的に話し合いたいと願うのであるが、本書は、そのような地点と内容を提供し

ようとはしない。むしろ、ひたすら福音派の誤りを告発しようとする意図に満ちているように感じられて、残念である。あたかも、初期のカトリックがプロテスタントを異端として告発し、自己の正当性を保持しつつ、プロテスタントと併れといった驕った立場に立ったように、著者は、福音派を正當に評価しようとする意図と地点には立っていないのである。

著者は、まず、ファンダメンタリズムとは何かを、本書全体で明確にするのに先立ち、第一章で

a 聖書の無謬性の熱心な主張

b 近代神学と批評学の方法と成果と意義への強烈的反感
c 自分たちの宗教的見解に同意しない人は真のキリスト者でないとの確信

といった特徴を持つものとの基本的認識を持ち、これを議論の出発点にしている。そして、ファンダメンタルの核心は、特異な宗教性にあるのであって、聖書ではないということを繰り返して訴えている。

私は、欧米の、長い伝統に根ざしたキリスト教と信仰の認識が、異教国に生まれ育ったキリスト者のそれと、本質的に異なるものなのかは分からない。しかし、「私は何をしたら救われるのか」との問いに対し、「主イエスを信ぜよ」との福音のメッセージと聖書の解答は、ファンダメンタルのみならず、キリスト教信仰の基本的内容であると認識している。このような信仰の在り方を「特異な宗教性」（三九頁）といった表現で語り、

一つの宗教現象として把握してしまう著者のキリスト教観を、私は、やはり解することができない。

著者は、続いて、福音派の聖書論を取り上げ、恐らく同じセマンティクスの学者ということであろうが、K・A・キッチンとR・K・ハリソンを、ファンダメンタルの問題性の全精神を発散している代表的な学者として否定的に批判する。更に「ニュー・バイブル・コメンタリー」と「ニュー・バイブル・ディクショナリー」は「いかがわしい多くの面を持っているが、三、四十年前のものと比較すると著しい進歩のあとが見られる」（一五二頁）としつつ、読むに耐えない本と決めつける。

こうして、保守的聖書学と聖書解釈学の誤りを解き明かし、結論としてファンダメンタルには神学がなく、あるとすれば、教理だけだと断定する。もし、福音派に呼ぶべき神学があるとすれば、その神学とは、

- 1 化石化した神学
- 2 断片的な神学
- 3 活動しない神学

だとする。なぜなら、「どんなキリスト者であっても、聖書を全く誤りなきものと信じる限り、その原理を全面的には受け入れている神学者の議論や意見を完全に度外視出来る」（一九三頁）からであり、著者によれば「ほとんどの神学者はこの原理を受け入れている」（同頁）のである。

こうした著者の見解が、私どもの立場からすると、対話が困

難になり、本書から生産的な信仰の在り方を得ることを難しくしている問題点があるように思われる。

著者は、神学を、キリスト教信仰の絶対性を前提として構築するものとは考えていない。むしろ、近代科学の一分野としての学問的方法論に基づくアプローチで解明したキリスト教の内容が、神学の領域とみているようである。従って、キリスト教信仰も、その絶対性も、ことごとく、学問の対象とされる。つまり、神学とは、キリスト教にかかわる信仰の内容と現象を、いろいろな視点にたって把握してゆくものなのであって、その結果、キリスト教信仰は、ことごとく、学問的には、相対化されるべきものになってしまう。そして、宗教学の一分野としてのキリスト教が、神学そのものになってしまうようである。ここには、信仰の前提とか、キリスト教的アプローチを設定すること自体が、神学の意義を失わせるものとなるのである。神学においては、信仰上の聖域は、全く存しないことになる。私どもは、「生ける神が、生ける言葉をキリストと聖書に完全に啓示し、今も、その救いの言葉を世の人々に提供し、み旨を終末に向かって実現しつつある」との信仰的認識と前提に基づいて、キリスト教信仰と世界を解明しようとしており、そのアプローチと内容を神学ととらえている。それゆえ、私どもは、この著者の立場と、どこで、どのように接点を発見し、対話を始めてゆくかが、大変、難しい課題としてあるように思われる。著者の、福音派に対しての視点と、キリスト教信仰に対する基

本的立場と認識を解すれば、著者が本書のなかで、ファンダメンタルに対して、いわば、言いたい放題のことを述べているのもうなずくことができる。著者によれば、ファンダメンタルとは、「矛盾のかたまり」(三六三頁)であり、キリスト者に、「嫌悪感をふきこむだけ」(一〇三頁)のものであって、「病理学的状態」(三六七頁)、として実に腹立たしく、対外的影響力としては「聖書学者や神学者にほとんど、あるいは全く何の影響も与えていないし、与えそうにない」(三八九頁)、「反啓蒙主義的、懐古的」(一四頁)なものである。いささか、感情的になりすぎている著者のいらだちも、著者を取り囲む情勢として、同情的に、かつ冷静に受けとめることができる。私どもは、こうした辛辣な皮肉と批判を冷静に覚えつつ、いよいよ謙遜に、聖書信仰に生きると共に、ここに提示されている、聖書学の課題を、福音的神学の立場から、解明してゆく努力を重ねてゆきたいと思わされたことである。

(日本同盟基督教団・衣笠中央教会牧師)

全国理事会報告

全国理事会書記

高橋 久之

一九八一年十一月十七日(「かんぼーる京都」にて)

一 「福音主義神学」誌の編集方針について

今期中に、次年度の方針を決定し、次期にそれを受けついで方がやりやすいので成案作成にかかる(山口、橋本)

二 予算の配分について

西部部会は、九州、中部と活動範囲が広いのと、会員数も多くなったので、次期の部活動費の配分を東西均等にする。

三 Asian Theological Association との関係について

ボロー氏(ATA書記)来日時要請を考慮し、今後友好関係を保つ。それ以上の関係を持つ場合は、東西部会の理事、会員の総意のもとに決定する。

報告

四

学会誌発行のための資金のための基金設置について
毎回個人の好意により出版資金を借用して、発行を続けて

来ているので、出版印刷のための「基金」作りの作業を始め

一九八二年五月十七日(神戸ルーテル神学校にて)

一 理事の役務分担

理事長 丸山忠孝
副理事長 鍋谷堯爾
書記 佐布正義、高橋久之
会計 工藤弘雄、小島彬夫
編集 山口 昇、安田吉三郎

(注—中部部会が出来たら、編集にもう一名を加える)
ニュースの編集は西部部会が行う。

二 本学会に入会される方の資格等について

申込用紙の中で、審議を必要とする箇所を指摘し、東西部会理事会で審議する。問題点は次の如し。

- (1) 第三条の「立場」の説明はこれでよいのか
- (2) 付則第四条の「理事会の構成」
- (3) 会員の資格審査のあり方

三 予算案について

別記の通り。第一回合同研究会議の記録の今後の売り上げ

は「基金」に繰り入れる。

四 「基金」について

「基金」の名称、目的、性格、運用等について、佐布理事と高橋理事が原案を作成する。

五 賛助会費値上げについて

十年間据置の会費一口五〇〇〇円を、一〇、〇〇〇円に引き上げるようにする。

六 日本人宣教師の本学会会費免除の措置に関して

申請があれば、免除できる道を講ずる。

七 第二回合同研究会議の開催について

テーマ——福音主義の聖書論(序論)

目的——福音主義の聖書論の歴史的背景を見直し、われわれ福音主義の立場を明らかにし、今後の方向づけを探る。

準備として——東西両部会でもこれを取り上げる。また、実行のための委員会を設ける。

東部部会活動報告

(一九八一年七月から一九八二年六月まで)

東部理事会書記

大 滝 信 也

一九八一年度

九月二五日(金)午後六時一〇分から九時までお茶の水学生キリスト教会館二二二号室で理事会が持たれた。出席者二二名、欠席者八名。第一回福音主義神学研究会議のための最終的な打ち合わせや準備をした。また、福音主義神学会と第二回伝道会議の関係について論じた。さらに、入会希望者五名を審査し、四名を正会員、一名を準会員として認めた。また、西部への一名の転出を認めた。

十一月一六日(月)から一八日(水)まで第一回福音主義神学研究会議が「かんぼーる京都」で開かれ、東部から四名の会員が発表した。なお、東部からの出席者は二九名で、そのうち会員は二五名だった。

十一月一七日(火)午後一時から一二時まで「かんぼーる京都」五一五号室で理事会が持たれた。出席者六名、欠席者四名。この時、翌年四月の総会の日時・場所について論じた。また、入会希望者九名を審査し、二名を正会員として、七名を

準会員として認めた。

一九八二年度

一月二二日(金)午後六時から八時三〇分までお茶の水学生キリスト教会館二二二号室で理事会が持たれた。出席者二二名、欠席者九名。この時、四月の総会・研究発表会・講演会の日時を最終的に決定し、そのプログラムを作成した。また、会誌の編集要綱を作ることを了承した。さらに、出版基金委員として東部から佐布正義氏を立てることにした。終わりに、入会希望者四名を審査し、一名を正会員として、一名を賛助会員として、二名を準会員として認めた。また、準会員一名の退会を認めた。

三月一九日(金)午後六時二〇分から八時三〇分までお茶の水学生キリスト教会館二二二号室で理事会が持たれた。出席者九名、欠席者一名。この時、四月の総会・研究発表会・講演会の最終的な準備をした。また、準会員一名の退会を認めた。

四月二六日(月)午後一時三〇分から八時三〇分までお茶の水学生キリスト教会館ホールで第一三回総会・研究発表会・講演会が開かれた。午後一時三〇分から二時までの礼拝では白井弘氏の司会でM・ジャコブセン氏が説教、二時から三時までの総会では議長が丸山忠孝氏、書記が大滝信也氏で審議が進められた。活動報告・決算報告の承認・予算案の審議並びに承認がなされた。東部会員数については、名誉会員は七名(前年度は

七名)、賛助会員は一名(前年度は一名)、正会員は一三三名(前年度は一二五名)、準会員は三六名(前年度は三〇名)、計一九一名(前年度は一七五名)と報告された。この時、理事の改選が行われ、次のように決定した。

理事長 丸山忠孝氏

書記 大滝信也氏

総務 横山 武氏

会計 小島彬夫氏、今野孝蔵氏

旧約 津村俊夫氏、斉藤孝志氏、大山武俊氏

新約 村瀬俊夫氏、内田和彦氏

組織神学 佐布正義氏、宇田進氏、小林和夫氏

歴史 湊 晶子氏

宗教学・宗教哲学 高力弘一郎氏

実践 モーリス・ジャコブセン氏、稲尾三活氏

編集 山口 昇氏、西 満氏、宮村武夫氏

会誌 中沢啓介氏

全国理事 丸山忠孝氏、佐布正義氏、今野孝蔵氏、山口昇氏

西 満氏、宮村武夫氏

午後三時から五時までの研究発表では、野口誠氏が「キリストの処女降誕——沈黙からの否定的論証の問題点」、稲尾三活氏が「ウエスレー神学とキリスト宣教教育」、飯島徹氏が「ジョン・ササン・エドワーズと千年王国待望」と題して発表した。なお、その後、西部理事の服部嘉明氏が「旧約聖書における慣用

を巡って」(問題提起・研究ノート)と題して特別研究発表をした。司会は山口昇氏だった。午後七時から八時三〇分までの講演会では、国際基督教大講師の稲垣久和氏が「科学とキリスト教認識論」と題して講演。司会は津村俊夫氏だった。

東京地区旧約部会報告

書記 下村 茂

一九八一年

二月六日 (参加者 五名)

会員の現況を報告し、部会日程を決める。

六月十二日 (十一名)

発題「聖書釈義と言語学——歴史的・文法的釈義とは何かを

考える」 津村俊夫氏

九月十八日 (七名)

発題「聖書と伝承におけるパラム」 油井義昭氏

一九八二年

二月五日 (六名)

発題「旧約釈義と説教について」 下村 茂

六月二十五日 (十七名)——新約部会と合同——

発題「聖書の正典的解釈を求めて」 中沢啓介氏

報告「ドイツにおける本文批評学の現況について」

本間敏雄氏

西部部会活動報告

(一九八一年八月より一九八二年七月まで)

西部部会書記

高 橋 久 之

一 第七回西部部会総会

一九八二年五月十七日、神戸基督教改革宗長老教会にて開催

○議事

- (一) 前年度の活動報告の承認
- (二) 前年度の決算報告の承認
- (三) 一九八二年度の活動方針の審議
 - (1) 中部部会および地区活動の強化
 - (2) 部門別研究活動の強化
 - (3) 財政基盤の確立(基金の設置)
 - (4) 賛助会費の増額と賛助会員の増加をはかる
 - (5) 国際的交流をはかる
 - (6) 若い研究者をばげます
- (四) 理事の改選

郵便投票により次の六氏がえらばる。清水汜、工藤弘雄、高橋久之、泥谷逸郎、安田吉三郎、P・ベイン

なお、泥谷氏が健康上の理由で辞退され、次点者、奥川泰弘氏を繰り上げ選任す。

(四) 予算案の審議ならびに承認(略)

○研究発表

「聖書における離婚と再婚の問題」(P・ベイン氏)

「キリスト教倫理の社会学への適用」(村田充八氏)

○講演

「日本文学とキリスト教」(清水汜氏)

二 理事会活動

○一九八一年十二月十四日、淀川キリスト教病院チャペルにて主要議事

(1) 第七回総会準備
新会員受け入れ

生田嘉文、田端武、鈴木英昭、園山陽輔、角川国次郎、山川国光、川上新一の諸氏

(2) ATAとWEFについて東部部会の意見についての見解

(3) 第一回東・西合同研究会議の反省と要望について

(4) 入会希望者について(入会申込書のあり方)

(5) 日本人宣教師の処遇について

○一九八二年七月五日、大阪基督教短大にて
主要議事

(1) 本年度理事役割

理事長 鍋谷堯爾

書記 高橋久之

会計 工藤弘雄

編集 安田吉三郎、清水汜

聖書神学部門 服部嘉明、鍋谷堯爾、安田吉三郎、P. ペイン

組織神学、歴史神学、宗教哲学部門 橋本竜三、松田一雄、

工藤弘雄、清水汜

実践神学部門 中島守、有賀喜一、奥川泰弘、高橋久之

(各部門責任者は筆頭記名者)

(2) 各部門活動費として、一〇、〇〇〇円ずつ助成金として支出する。

(3) 前任理事への慰労金

五島勝、泥谷逸郎氏におくる。

(4) 「基金」について

佐布、高橋両理事の原案を承認。

(5) 第二回合同研究会議の準備について

(6) 秋の研究会議について

(7) 中部部会設立に伴う諸案件について

地域の設定、現会員中該会員の帰属の問題、当面の活動費、事務処理上の問題（全国理事会にはかる）等について

中部部会発会

かねてから準備されていた名古屋地区を中心とした中部部会の発会は、一九八二年七月十三日、大韓名古屋教会において設立総会を開催し、ようやく実現した。

同設立総会において、中部部会の理事として、後藤喜良、河野勇一、鈴木健之、内村サムエル、牧田吉和、黒川雄三、安村仁志の各氏が理事として選出され、黒川雄三氏が理事長に選出された。

なお、同日記念講演として、鍋谷堯爾氏により「福音主義神学の癡め」と題して、清水汜氏により「太宰治と聖書」と題して、講演が行なわれた。

(8) 新会員の受け入れ

池田英勝氏

三部会活動

○一九八二年五月二十四日・聖書学部門

「イエス時代の税制について」 林正輝氏

「黙示録における聖の概念」 久保田周氏

○一九八二年七月五日・旧約学部門

「旧約における慣用句的表現をめぐって」

服部嘉明氏

『福音主義神学』第12号「BHS, その本文の性格と問題点」の正誤表

頁	行	誤	正
3	17行目	ティックネー	ティックーン
5	9行目	temym	t'mym
9	12行目	wayaggaed	wanaggaed
11	10行目	lo'	llo'
13	12行目	ta'asāe	ta'a'sāe
15	13行目	q'	q'
18	6行目	エリザー	エリガー
22	2行目	kt'	kt'
"	"	q'	q'
23	10行目	Higger	Higgar

「福音主義神学」執筆についてのお願い

日本福音主義神学会編集委員会

一 文体、用語

原則として文体は国語体、漢字は常用漢字、仮名づかいは現代仮名づかいを使用した平明な表現でお願いします。原稿はタテ書、四〇〇字詰原稿用紙を用いること。論文中のヘブル語の表記は音写による（カナまたはラテン文字）。ギリシャ語の表記は原文のまま使ってください（特にアクセント、ブリーディングを正確に付けてください）。

二 枚数

論文は四〇〇字詰原稿用紙四〇〇～四五枚、紹介、書評は五～一〇枚程度といたします。枚数が超過して提出された場合、書き直しをお願いすることがあります。

三 締切期日

論文は毎年六月末日までに所属する部会（東部または西部）の編集者に提出して下さい。書評、紹介等は七月十五日まで。

四 論文、書評の依頼は編集委員会が行ないますが、論文を投稿することもできます。この場合は所属部会の編集者に原稿を提出し、編集委員会の審査を受けることになります。いずれの場合にも、原稿の最終取捨選択権は編集委員会にあります。

五 注記

注は本文の後に通し番号を付け、一括して下さい。引用文献等の表記の仕方は別記参照のこと。

六 校正

論文の再校以降は編集委員会（主に出版社）で行ないます。なお、校正時における訂正は最少限にし、する場合にも、ほぼ同一字数内での差替えを原則とし、数行にわたる組替えを必要とする加筆、削除等は御遠慮下さい。

七 原稿料

原稿料は支払いません。論文については会誌を五部、書評等に対しては二部を執筆者に贈呈いたします。

八 英文概要

論文は英文による概要をタイプ用紙一枚程度にタイプし添付して下さい。

文献の表記の仕方について

一 邦語文献

(イ) 単行本

- ① 佐々木順三『教会暦年の研究』（聖公会出版社、一九三九年）五四頁。
- ② ルネ・パーシュ『イエス・キリストの再臨』（いのちのことば社、一九七八年）五三―五四頁。
- (ロ) 一つの本の中に多くの著者があり、その一つ一つが独立した論文になっている場合
- ③ 岸本通夫「印欧語の移動とヒッタイト王国の台頭」『岩波講座、世界歴史』I（岩波書店、一九六九年）一六一―三頁。

(ハ) 論文

- ④ 五島勝「キリスト論的称号の扱いに見るルカの姿勢」『福音主義神学』第二二号（一九八一年）五三―五四頁。
- (ニ) 以前に引用した本をつづいて引用する場合
- ⑤ 前掲書 三二頁（または同頁）。
- (ホ) 間に別の本が入っている場合
- ⑥ ルネ・パーシュ『イエス・キリストの再臨』（著者名と書名だけ。前掲書を用いない）。

二 外国語文献

一般原則は次の本を、表記の具体例は(a)以下を参照して下さい。

Kate L. Turabian, *A Manual for Writers of Term Papers, Theses, and Dissertations*. 4th ed., Chicago: The University of Chicago Press, 1973.

106

(a) Books

One author

Paul Tillich, *Systematic Theology*, 3 vols. (Chicago: University of Chicago Press, 1951-63), p. 9.

Three authors

Bernard R. Berelson, Paul F. Lazarsfeld, and William McPhee, *Voting* (Chicago: University of Chicago Press, 1954), pp. 93-95.

More than three authors

Jaroslav Pelikan et al., *Religion and the University*. York University Invitation Lecture Series (The University of Toronto Press, 1964), p. 109.

Editor as "author" (same form used for compiler)

J. N. D. Anderson, ed., *The World's Religions* (London: Inter-varsity Fellowship, 1950), p. 143.

Article in a journal

Don Swanson, "Dialogue with a Catalogue," *Library Quarterly* 34 (December 1963): 115.

(b) "Ibid."

When references to the same work follow each other without any intervening reference, even though the references are separated by several pages, the abbreviation "ibid." for the Latin *ibidem*, "in the

same place") is used to repeat as much of the preceding reference as is appropriate for the new entry:

¹ Max Plowman, *An Introduction to the Study of Blake* (London: Gollancz, 1952), p. 32. [A first, and therefore complete, reference to the work.]

² Ibid.

[With no intervening reference, a second mention of Plowman's work requires only "ibid." Notice that "ibid." is not underlined.]

³ Ibid., p. 68.

For a book, a second or later reference to a work already cited in full form, but not in the reference immediately preceding, *omits* the facts of publication, series title, if any, edition (unless more than one edition of the same work has been cited), and total number of volumes. Thus pared down, the reference consists of author's last name, title of the work, with page, and volume number as well, if necessary. Note the full reference in footnote 1 and a later reference to the work as shown in (arbitrarily numbered) footnote 9:

¹ Gabriel Marcel, *The Mystery of Being*, 2 vols. (Chicago: Henry Regnery Co., 1960), 1: 42.

⁹ Marcel, *Mystery of Being*, 2: 98-99.

編集後記

「福音主義神学」の第十三号を、皆様のお手もとにお届けできることを感謝しております。

今回は論文三本と、講演一本を掲載いたしました。稲垣久和先生の講演は、東部部会の今年度春の総会においてなされたものですが、神学と自然科学の関係を取り扱った非常に啓発的な内容でしたので、先生に原稿にまとめていただき、当日出席できなかった会員の皆様にも、その恵みをおわちできる幸いを感謝いたしております。

東部部会からは、もう一本、救済史を扱った歴史神学部門の論文が寄せられるはずでしたが、筆者の先生が御多忙のため、ついに予定の期日までに原稿をいただけませんでした。これは次回に期待したいと思います。

書評も連絡の行き違いからか、西部部会担当の分が到着しないまま、最終締切期日を過ぎてしまいましたので、三篇と例年に比較して少なくなっていました。

編集委員もそれぞれ任期が満了し、改選されました。その結果東部部会是一名増員して、三名（西満、宮村武夫、山口昇）に、西部部会二名（安田吉三郎、清水汎）となりました。なお、七月に中部部会が発足いたしましたので、近く中部部会から一名の編集委員が選出される予定です。このように組織も次

第に拡大して来ましたが、そのための連絡の緊密化がいっそう必要となっています。近く全国理事会において、この点に関して十分に審議してもらい、良い解決の方法を見出したいと考えています。

組織の拡大とともに、会員数も次第にふえ、各部門別の活動も軌道にのり、次第に充実して来たことは、非常に喜ばしいことだと思えます。それにつれて、本誌の内容もいっそう充実したことになる、大いに期待をいたしております。

特に新々鋭の会員による論文の投稿を歓迎いたします。論文の執筆要項は本誌にその要旨をご紹介しましたが、詳細をお知りになりたい方は、印刷したものがありますので、本会事務局にお申し出になるか、所属なさっている部会の編集委員にお申し出ください。ただし論文投稿の場合の採否は、編集委員会において決定させていただきます。

各編集委員とも多忙の上、地理的にも離れておりますため、なかなか十分な連絡がとれず、苦勞しておりますが、ともかくにも十三号の編集を終え、ほっとしております。これらの原稿が会誌の形をとるまでに、いのちのことは社出版部の皆様が、いろいろと陰の苦勞を惜しまずにおこなってくださることを覚え、一筆感謝の意を表したいと思えます。

本誌がいよいよ充実したものとなるために、どうぞこれまで以上に会員の皆様がお祈りくださり、積極的に原稿をお寄せくださいますよう、ご協力をお願いいたします。（山口 昇）

一九八二年十一月五日発行

定価 一七〇〇円

編集者

橋本龍三
西村武夫
宮口昇

発行者

国立市谷保八四五三
東京基督教学園
東京基督神学校内
日本福音主義神学会

印刷

いのちのことば社印刷部

発売 いのちのことば社